

神の国へ歩み続け

奨励	大塚 慎【おおつか・しん】
奨励者紹介	日本キリスト教団宇治教会牧師 宇治教会附属愛児園園長

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

(ルカによる福音書 17章20—21節)

“We shall overcome”

関西地方には、阪神タイガースファンが多いと思いますが、神戸出身の私もその一人です。今年は、10月まで楽しめましたので、嬉しかったです。今年、優勝争いができたのは、マット・マーTONの復活や、ランディ・メッセンジャー投手等外国人選手の活躍が大きかったのではないかと思います。タイガースの話をし出すと長くなりますので、止めておきますが、マートン選手は敬虔なクリスチャンで、伝道集会で講演したり、キリスト教の雑誌のインタビュー記事に登場したりもしています。私も甲子園球場で、マートン選手がヒーローインタビューを受けたときに、「イエス様に平安がある」と言っているのを聞いたことがあります。甲子園球場と言うと、あの応援風景が有名ですが、私の記憶では、掛布選手が活躍していたころから、熱狂的なシュプレヒコールが始まったように思います。スポーツの応援や喜びを表すシュプレヒコールですが、礼拝で喜びを表すのは、讃美歌です。この後、共に讃美する讃美歌21—471番は、あのアメリカの公民権運動のなかでまさにシュプレヒコールのように歌われたものです。原題は“ We shall overcome”（我々は必ず勝利する）という主イエスと共にある希望に満ちた喜びの歌です。この曲のルーツについては、いろいろな説があるようで、一つは、アフリカ系アメリカ人霊歌ではないかという説があります。ルーツとされるその元の霊歌には、讃美歌21—260番の曲が付けられていました。クリスマスソングの「いざ歌え、いざ祝え」という曲です。確かに最初の8小節を見ると、「いざ歌え、いざ祝え」と「勝利をのぞみ、勇んで進もう」は、良く似た旋律となっています。この「いざ歌え、いざ祝え」の原題は「シチリアン・マリナーズ」、「シチリアの船乗りの歌。おとめマリアに寄せて」となっています。マリナーズ、すなわち船乗りとの関連から、この旋律は、アフリカからヨーロッパを回って、奴隷としてアメリカへ連れて来られた人たちの、船上での労働歌であったのではないかという説もあります。1940年代に入って、この歌は文字通り口伝えに広がり、アフリカ系アメリカ人の労働条件改善のストライキや、人種差別撤廃運動などで歌われたのです。

神の国の到来

私たちキリストの教会には、イエス・キリストの教えを受け継いで、その教えの実現のために働くという使命が与えられています。キリストは、その生涯のなかで、さまざまな教えを述べられたのですが、そのなかの一つが、「神の国の到来」でした。今日読んでいただいた聖書は、そのことに関する箇所ですが、それを見ていく前に、実際に、この教えの実現のために働いた人物のことに触れたいと思います。それは、黒人差別と闘うために公民権運動を推進したマーティン・ルーサー・キング牧師です。先ほど触れた讃美歌471番にも象徴されているように、1950年代半ばから60年代末にかけて展開されたアメリカ公民権運動は、ある意味で「歌う運動」でもありました。音楽が、喜びの実現のための大きな力となったのです。そこでは黒人の先祖たちが歌った黒人霊歌が、一部、言葉を入れ替えて歌われたり、黒人ゴスペルが盛んに歌われました。それらの歌が、彼らの非暴力主義運動を支えたのです。“We shall overcome”は、1963年、20万人が集まり、公民権運動の一環として行われたあのキング牧師が先頭に立った「ワシントン大行進」でも歌われ、その映像が、世界中に放映され、自由と平和を目指す人びとの心を支える力となりました。キング牧師の有名なメッセージは、ワシントン大行進のなかで述べられた、“I have a dream.”で始まるものです。1963年8月28日から、今年でちょうど50年目を迎えて、首都ワシントンでのオバマ大統領も演説をした集会を始め、世界各地で記念行事が行われているようです。キング牧師の、歴史的メッセージの一節です。「私には夢がある。それは、いつの日かジョージア州の赤土の丘の上で、かつての奴隷の子孫とかつての奴隷主の子孫が、ともに兄弟愛のテーブルに着くことができることである。私には夢がある。それは、いつの日か不正義と抑圧の暑さにうだっているミシシッピ州でさえ、自由と正義のオアシスに変えられることである。私には夢がある。それは、いつの日か私の幼い四人の子どもたちが、彼らの肌の色によってではなく、人格の深さによって評価される国に住めるようになることである。」(コレッタ・スコット・キング編、梶原寿他訳『キング牧師の言葉』日本基督教団出版局 1993年)キング牧師の痛みと決意がにじみ出ている重い言葉です。彼は、特に人種差別のひどかった、アメリカ南部のジョージア州アトランタの牧師の家庭に生まれました。彼の優れた点は、その教会親にも表れていました。当時、黒人が集う大抵の教会では、「今は、我慢なさい。差別されても我慢して、ひたすら信心深く生きれば、やがて天国に招かれて、救われる」というメッセージが述べられていました。しかし、キング牧師は違いました。彼は、「今は、我慢なさい」ではなく、「今こそ、差別の無い平和な社会の実現のために立ち上がるときだ」と教えたのです。そのために「今こそ」教会が働かなければならないと教えたのです。神は、人間を互いに理解し合い、支え合って生きるために創造されたのであって、差別によって憎み合うために創造されたのではない。キリストの体として働く教会が、差別を黙認するようなことがあってはならないし、今こそ教会が、差別と闘い、差別の無い世界を実現するために積極的に働かなければならないのだと、キング牧師は訴えたのです。そして、そのようなキング牧師の考えの根拠ともなるのが、今日の聖書の箇所なのです。

ファリサイ派と主イエス

今日の箇所には、まず、「ファリサイ派の人々」が登場します。彼らは、ユダヤ教の一派で、律法というユダヤ教の規則を事細かに研究していたグループでした。「ファリサイ」という言葉は、もともとは、「分ける」という意味で、「自分たちは、他のやつらとは違うグループなんだ」ということで、言ってみれば、「エリート派」というような意味の名前を自ら付けていたわけです。日夜、律法の研究をして、そこまでは、良いのですが、いかに自分たちが細かい規則を守っているかということを誇示する一方で、それらを守れない人びとを差別していたのです。そして、差別を受けたのは、大抵、女性や病人、羊飼いや収税人といった当時、社会的に弱い立場におかれていた人びとでした。今日の箇所の直前には、主イエスが、重い皮膚病を患っている人びとを癒す記事が記されていますが、ファリサイ派の人びとは、そうした病人、すなわち彼らが差別していた人びとと共に歩んでいる主イエスを何とか陥れようと常に機会をうかがっていたのです。そんな彼らですから、いろいろなことについて、主イエスとは考え方が異なっていました。そして、今日の箇所で問題になったのは、「神の国」です。神の国とは、天国とも呼ばれますが、要するに、神の救いが完全に実現する世界ということです。肉体的にも、精神的にも全ての痛み、苦しみから解放される、当然差別など無い世界です。ファリサイ派の人びとを始め、当時のユダヤ教徒たちは、「神の国」を遠くにある夢のような世界、今の世界とは全く別の世界だと考えていました。「今は我慢しろ。いつか夢の世界に、天国に行ける」と教えたジョージア州の教会と同じような考え方です。それに対して、主イエスは、「神の国はあなたがたの間にあるのだ」と教えました。つまり、「神の国」は、どこか遠くにある「夢の国」などではなく、神の子イエス・キリストと共にいてくださる今、この場こそ、神の国であるのだということです。1963年9月15日にアラバマ州バーミングハムの黒人教会が爆破されて、4人の少女が犠牲になったときに、キング牧師は次のような告別の辞を述べています。「人を傷つけたことのないこの無邪気な、美しい子供たちは、今まで人間性に対して犯されてきた最も悪意のある、憎むべき犯罪の一つの犠牲者となりました。(中略)彼らは私たちに向かって、ただ単に彼らを殺した犯人に関心を抱くだけでなく、その犯人たちを産み出した体制と生活様式と哲学にも関心を向けなければならないと語っています。(中略)だから彼らは無益に死んだわけではありません。神は依然として悪から善を絞り出す道を備えておられます。歴史は繰り返し繰り返し不当に受ける苦難には贖罪の力があることを証明しています。この少女たちの無辜(むこ)の血は、この暗黒の町に新しい光を点す贖罪の力として奉仕していると言ってもよいのであります。(中略)それゆえこの時の暗黒にもかかわらず、私たちは絶望してはなりません。私たちは恨みがましい気持ちを抱いてはなりません。また暴力で報復しようなど望んではなりません。」(クレイボーン・カーソン編、梶原寿訳『マーティン・ルーサー・キング自伝』日本基督教団出版局 2001年)キング牧師は、主イエスの教えに従って、神の国の実現のために働き続け、ついには暗殺されました。キング牧師が述べたこの式辞は、自らにも捧げるものとなってしまったのです。しかし、主イエスの「神の国はあなたがたの間にある」との教えに従い、「神の国」は、遠くにある夢の国ではなく、イエス・キリストに従って歩むことであり、それは、今、ここに実現される世界なのだ信じて共に平和に生きることを目指したキング牧師の歩みは、彼の死で終わったのではなく、神の国の実現のために働く現代の教会に、そして、自由と平和を信じるもうとする一人ひとりのなかに、その実現の日まで受け継がれるのです。その意味で、キング牧師の死は、まさに贖罪の力として、多くの人びとを希望へと導く道標となったのです。

神の国は あなたがたの間に

「神の国はあなたがたの間にある」という聖書のみ言を私たちはどれだけ深く受けとめることができるでしょうか。

同志社の創立者、新島襄は、草創期において、その自宅を開放し、学生と共に礼拝を守り、伝道を行っていました。礼拝堂のないこの京田辺校地で、こうして一教室を借りて礼拝を守っている私たちと同じなのです。そして、新島の家で始まった同志社教会は、今や会員１００名を超える大きな教会となりましたが、いまだに、自分たちの会堂を持たず、同志社女子大学の栄光館を借りて礼拝を守っています。

教会は、何よりも礼拝を重んじ、それを執り行う礼拝堂も大切なものとしています。

日本を代表するミッションスクールと、そこから生まれた教会に、礼拝堂がないというのは、残念なのですが、反面、新島が始めた伝道のスタイルは生きているわけで、同志社を卒業した牧師としては、複雑な心境です。

そこで、イエスはどう思われるだろうか、とも思うのです。

礼拝堂がないということをイエスはどう思われるのか。

おそらく「そんなことは、関係ない」と言われるのではないかと思います。

「神が棲まわれるのは、立派な建物や設備の中などではなく、あなたがたの間なのだから」と言われるのではないか。

「神の国はあなたがたの間に」・・・

私たちを取り巻く現代社会は、この主イエスのみ言を踏みにじるような状態であると言わざるを得ません。

あの公民権運動のなかで、自由と平和を目指して、ワシントンを行進したキング牧師の時代と何も変わらないどころか、問題は更に複雑化しています。

そのような社会のなかで、その現実を無視して過ごすのか、それとも、現実を直視し、平和の実現のために働くのかで、私たちの人生、そして、世界の未来は、大きく変わるので

す。

神の国の実現の一步は、差別と闘うことですが、それは、何かの大プロジェクトに参加するというようなことだけではなく、まず、「神の国はあなたがたの間にある」というイエス・キリストの言葉をしっかりと受けとめて、主イエスこそが私たちを真の平和に導いてくださることを信じ、感謝することから始まるのです。そうすれば、神様は、それぞれが歩むべき具体的な道を示してくださるのです。

各地で、戦争やテロが、そしてさまざまな差別が繰り返されている現実のなかで、なお主イエスは、「神の国はあなたがたの間に」と語り続けてくださる恵みと責任を深く受けとめながら、歩み続けていきたいと思います。

2013年10月16日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録